

現地ルポルタージュ

森林・林業に配慮した木の家づくり活動

はじめに

森林や林業に配慮した木の家づくりのためのネットワークが各地で動き始めている。例えば、埼玉の建築家や生活クラブ生協と秋田の杉産地による「モクネット」、地元の大学の研究者と建築関係者による「木造ネットワーク・みちのく」、さらに「九州木の家づくり協同組合」や「山梨森と木のネットワーク」、「富山の木で家を作る会」等の活動があげられる。

これらのネットワークは、仕掛け人が製材所なのかあるいは建築士なのか等立場の違いや地域性により具体的な活動は異なる。しかし、林家や製材所、大工、工務店、建築士、一般消費者という木造住宅に関わる様々な人達が主体的に参加し、家づくりを通して林業や森林・環境問題を考えようとしている方向性は共通している。

本文では、これらの活動の具体的な事例として、東京を舞台に林業家からユーザーまでが参加して、木の家づくりの地域内循環を目指している「東京の木で家を作る会」と、関西で長年にわたり林業地との連携を組みながら木の家づくりに取り組んでいるMs建築設計事務所の三澤文子さんの

活動を紹介する。

東京の木で家を作る会

「東京の木で家を作る会」は、東京都檜原村の民有林で山仕事を行っている森林ボランティアグループ「浜仲間の会」の活動の中から生まれた。「浜仲間の会」は、一九八七年に大雪によって被害を受けた多摩地域の山林の復旧活動を契機に設立された森林ボランティアグループである。この「浜仲間の会」での山仕事や林業家との付き合いを通して山村や林業の現状に触れる中で、メンバーである建築士の長谷川さんや住宅業界を長年渡り歩いてきた稲木さん、「浜仲間の会」の発起人の羽鳥さんたちが中心となって、「山仕事だけでは山は救われない。国産材の多くは建築用材として使われているのだから、健全な森林を維持していくためには、地元材を活かした家づくりを始めよう」との目的で九六年四月に「東京の木で家を作る会」が発足した。厳しい林業の現状に直接触れることにより、その解決策として山側から都市側までを巻き込みながら家づくりに取り組んでいるユニークな市民組織である。

そのため、同会の家づくりは一般の設計

事務所に住宅建築を依頼する場合とは異なる。一般的には、まず予算や間取りを相談しながら設計契約を結び、実施設計を行う。そして工務店の見積りを検討、工事の請負契約を行い、着工する。しかし、同会の場合、家づくりを通して東京の貴重な山林やそこで営まれている林業の現状を知ることが重要となるため、まず同会の趣旨に賛同したら「ユーザーの会」に入会する。その後、「建てた人とこれから建てる人」や「森林を育てる家づくり」等と題した林業・森林、家づくりに関する勉強会に参加したり、実際に多摩地域の林業家の山林を見学するほか、時には山仕事も体験する。このようにして家に使われる木材や林業そして森林についての理解を深めながら家づくりに取りかかるのである。こうした勉強会は、年間五、六回以上行われている。

現在、会員は多摩地域の一名の林業家、製材所三工場、工務店一事務所、建築家（設計事務所）七事業所がプロの作り手として「正会員」になっており、さらに木造住宅には関心が高いものの技術や経験が浅い建築関係者が「協力会員」として四〇人程度参加している。このほか勉強会や見学会等の際に森林や林業の専門家として会をサポートする「賛助会員」が三三人、そしてこれから家を建てようとしている人や森林・環境問題に興味をもっている一般消費者が七〇人程度「一般会員」として参加し

ている。「一般会員」には、あれこれと住宅メーカーを回ったが納得できる家づくりに巡り会えなかったこだわりをもつ消費者が多いと言う。

同会が建てた家は、東京や千葉等関東を中心に三五棟でリフォーム等も手掛けている。

Ms 建築設計事務所 三澤文子さん

三澤文子さんは、一九八五年に夫の三澤康彦氏とともに大阪でMs建築設計事務所を開設して以来、徳島の木頭スギや奈良の吉野スギ等関西地域を中心に木材を活かした家づくりを進めている建築家である。八五年から今までに手掛けた住宅は一〇〇棟以上。

三澤さんは、建築家として駆け出しの頃から具体的な提案ができる住宅建築に興味をもっていたものの、初めは木材そのものにはそれほどこだわりを持っていなかったと言う。しかし、東京の「現代計画研究所」に所属していた時に、建設省の「いえづくりに八五プロジェクト（八二年）や林野庁が主催した「国産材ハウス」プロジェクト等に木造建築のスタッフとして参加したことをきっかけに、森林や林業といった建築とは異なった分野に興味を持ち始めた。さらに、それぞれの地域に適した住宅づくりである「民家型構法」に出会い、それ以来地域の森林や林業にまで配慮した木の家づくりを進めている。

三澤さんが主宰するMs建築設計事務所の家づくりの大きな特徴は、木材の供給の大

元である林業家等山側と信頼関係を築きながら、木材に関する独自の流通ルートを築いていることである。質の良い木造住宅を造るためには、しっかりと乾燥され構造に耐え得る木材が必要となるが、既存の流通ルートに頼っているだけでは、そうした木材が適切な価格では手に入らないと言う。乾燥したスギ材を供給してほしいと山側に要求しても、「それはできない」とか「これ（生木）でいいじゃない」といつて面倒がられる。そこで、業を煮やした三澤さんたちは納得できるような木材を求めて産地に出向き、信頼できる山側と納得できる木材を確保するための新しい流通ルートを試行錯誤しながら開拓してきた。例えば、専業林業家五人で徳島杉の乾燥材生産に取り組んでいるTSウッドハウス協同組合（徳島）の林業家和田義行さんとは、一五年近く前から山と街が直結した木材の流通ルートづくりに取り組んできた。このほかには、吉野材の新しい流通経路を模索している若手の木材業者との取引も、さらに九州での建築の際には、大分県上津江村の第三セクター「トライウッド」との連携も進めている。

今回、林業や森林に配慮した木の家づくりに関わる建築家、インテリアコーディネーター、住まい手等何人かの方からお話を伺う機会を得たが、そこで聞かれたのは「家を建てる側がほしいと思っているよう

な木を出すところがない」との声だった。「ほしい木」とは、「四面無節」に代表される「見た目に美しい高級材」ではなく、「節があっても問題ではない。きちんと乾燥されて構造上問題がない木」である。

日本の林業は、和室に使われる無節の柱や板を造るために営まれてきた。しかし、現在無節を求める声は少なく、それよりも構造的にしっかりと耐え得る木が求められている。こうした需要の変化に柔軟に対応できないのが育成期間五〇年以上という日本の林業の宿命とも言えるが、しかし全く対応できないことはない。戦後大量に植えられた木々が一定の大きさにまで成長していることを考えれば、工夫次第では地域材・国産材を求める声に対応し得る部分は残されているように。

新建材住宅に代表されるような「シックハウス」問題や三〇年サイクルと言われる日本の住宅寿命の短さ、さらに金にものを言わせて世界の木材を買いあさることへの批判等から、地域材・国産材を使った「持続可能な木の家」を求める声は小さいながらも確実に存在している。

「全面崩壊」とも言われるほど厳しい日本の林業ではあるが、以上紹介したようなお互いの顔が見えるネットワークの一員として、積極的に国産材・地域材を求める声と対話することがまず必要であると感じた。

（栗栖祐子）